

The Golden Notebook のうちに見る

Doris Lessing の女性観

八 幡 雅 彦

1. Doris Lessing との出会い

昨年、短大の授業で Margaret Drabble, *The Tradition of Women's Fiction* を講読した。これは、*Lectures in Japan* というサブタイトルが示す通り、Drabbleが1980年11月、日本へやって来て、大谷女子大、神戸女学院大、帝塚山学院大、甲南女子大、武庫川女子大、英国文化センターの6会場で行った講演を帝塚山学院大の須賀有加子氏が編集して1冊の本にまとめたもので、東京のオックスフォード出版局から1982年に出版された。

そのうちの第1章 “The Tradition of Women's Fiction: Jane Austen to Doris Lessing”⁽¹⁾ (帝塚山学院大での講演)のうちで Drabble は Jane Austen から始まる英国女流作家の伝統について述べている。その要旨はだいたい次の通りである。

19世紀の女流作家たちは、男性中心の社会において正々堂々と小説を書くことなど許されておらず、Austen は小説を書いている最中に訪問客があつたら書くのをやめ何か他のことをやっているふりをし、Brontë 姉妹は自分たちが女流作家であることを人々に知られるのを恐れ匿名を用い、George Eliot は男性の作品の方が受け入れられ易いという理由で男性名を用いた。しかし小説を書くには学歴も資格も資本も必要ない。そして19世紀においては女流小説は他の芸術形式のようにはまだ確立されておらず、Virginia Woolf のことばを使えば、まだまだしなやかで柔軟性に富んでおり、女流作家たちは、厳格な男性的規律 (rigid masculine code) に従う必要もなく、自由に自分たちの人生に対する理解を表現することができた。そんな理由で彼女たちは小説を書いた。彼女たちは当時の社会における女性の地位に憤慨し、女性の狭い世界に対するいらだち、欲求不満、義憤を小説に表現した。

20世紀初頭になると、Virginia Woolfを初めとして、女流作家たちは女権拡張を目ざしての自分たちの役割を、以前の作家たちに比べるとずっと自覚するようになった。しかし彼女たちは過去の女流作家たちと断絶したのではなく、その伝統の上に立脚して、その恩恵を受けながら創作を続けた。Drabble自身過去の女流作家たちとの連帯ばかりでなく、Doris Lessing、Mary McCarthy、Nell Dunn、Muriel Spark、Iris Murdoch といった同時代作家たちとの連帯も強く意識している。ただ20世紀初頭までの女流作家はそのほとんどが、Elizabeth Gaskellを除いて、未婚か、たとえ結婚していてもWoolfのように子供がいなかった。それに反して今日の女流作家たちは、Lessingにしろ、Drabbleにしろ、さらにはPenelope Mortimerにしろ、Edna O'Brienにしろ、結婚して子供を持ち家庭を営みながら創作に励んでいる。したがって19世紀の女流作家たちが描いたのは違った女性の経験を今日の女流作家たちは描くようになった。

1960年にD.H. Lawrenceの*Lady Chatterley's Lover*(1928)が英国で解禁になったのを機に、小説における描写の抑制が緩和され、セックスばかりでなく出産、育児、病気などを題材とした婦人科学的告白が女流作家たちによって盛んに描かれるようになった。そのため過去10年間から20年間の女流小説は極端に重苦しく、女性の人生を非常に暗い観点から示しているという批判さえ生まれてきた。これらの女流小説を読むと、女性たちは現代世界と戦ってゆくことができず失敗を運命づけられているような印象を受けるかもしれないが、Drabble自身は女性の未来を信じており、小説を通じて、男女平等とより多くの幸福が存在するより良き未来を創造できるとも信じている。しかしなおかつ、小説のうちにこの肯定的イメージを創造するのは非常に難しい。たとえばDrabbleは*The Millstone*(1965)において肯定的な女性像を描き出そうと試みたが、書き終えてみてヒロインの人生に何か狭いものを感じた。その後*Jerusalem the Golden*(1967)を書いた時には、すてきな人間であると同時にキャリアガールであるというのは不可能のように思えるということを彼女は発見した。さらに*The Realms of Gold*(1975)においては、子供にも仕事にも愛人にも恵まれた、生きてゆく上ですばらしいものを数多く身につけたヒロインを彼女は創造したが、それだけでは何らプロットがないことを発見した。この女性の人生から物語を作り出すためには、何かが狂わなければならなかった。Drabbleは結末でこのヒロインを結婚させたが、結婚は敗北であり、失敗

であり、自殺や神経衰弱と同じくらい悪いと考えるフェミニズム擁護論者たちからものすごい反論を受けた。*The Middle Ground*(1980)を書いた頃には、彼女は女性の問題に関して頭が混乱していたために、この作品を完全な疑問符で終わらせた。登場人物の女性の未来はどうか分からないままにしておいた。これがまさに女性の未来に関する Drabble 自身の見解であり、人々に女性の未来を問われても彼女は答えることができないという。

そんな彼女が、女性の未来に光を与えてくれると信じている作品が Doris Lessing の *The Golden Notebook*(1962) で、これはウーマン・リブ運動のバイブルとみなされた、女流小説の歴史においては非常に重要な作品であるという。そして Drabble はこの作品の中の次の一節を引用している。

After a while I realized I was doing what I had done before, creating 'the third'—the woman altogether better than I was. For I could positively mark the point where Ella left reality, left how she would, in fact, behave because of her nature; and move into a large generosity of personality impossible to her. But I didn't dislike this new person I was creating; I was thinking that quite possibly these marvellous, generous things we walk side by side with in our imaginations could come into existence, simply because we need them, because we imagine them.⁽²⁾

Drabble はこの一節を読むといつも涙が出るほど感動するという。この一節については後でもう一度触れるとして、だいたい以上のようなことが “The Tradition of Women's Fiction: Jane Austen to Doris Lessing” の内容である。

したがって筆者が Drabble を通じて初めて得た Doris Lessing 像は、ウーマン・リブ運動の最先端をゆく女流作家というものであった。このようにして筆者は Lessing という作家に興味を持ち、読んでみようという気になったのである。

筆者が最初に読んだ Lessing の作品は短篇集 *Five*⁽³⁾(1953)で、タイトルが示す通り5つの短篇から成り立っており、そのうち4篇がアフリカを舞台としたものであり、英語も平明で読み易く、アフリカ黒人と白人植民者の間の葛藤の描写が生々しく、そして何よりもそれを距離をおいたところからつき放して

眺める Lessing の目の冷やかさに印象づけられ、知らず知らずのうちに作品のうちに没頭していた。

しかし筆者がこの短篇集のうちでもっとも興味を覚えたのは残りのひとつ、戦時下の London を舞台とした物語である “The Other Woman” であった。この作品のヒロイン Rose の母はトラックにひき殺され、彼女は恋人 George との結婚をあきらめる。しかし彼の妻となった女性が爆死し、Rose はふたりの間に生まれた娘 Jill を引き取ろうとするが、George の祖母がすでに引き取ったことを知りショックを受ける。おまけに Rose は父親が爆死してしまい、その後彼女は自分を慰めてくれた兵士 Jimmy と恋に陥るが、これが自律性のない幼稚でだらしない男。ふたりの言い争いが絶えない頃 Rose は George の戦死を知って、George の祖母のもとにいる Jill を養子に欲しがりますが、Jimmy は猛反対する。しかし結局最後には Rose は Jimmy と別れ、彼は別な女性と結婚し、Rose は Jill を養子に引き取って George の祖母といっしょに住むことを決心する。以上が物語の大筋であるが、George の祖母が最後に “...by the time she(Jill) grows up perhaps there won't be wars and bombs and things, and people wo't act silly any more”(p. 121). と言っているように、この作品の主なテーマは「戦争」ということだろう。この後、Lessing の作品を読み進むことによって、黒人問題を主とする「人種差別」、男性中心の社会に生きる「女性」、 Kommunismus を主とする「政治」というのが彼女の作品の 3 大テーマだと筆者は感じるようになったが、この作品は、戦争がいかに庶民の生活を引き裂いたかという政治的テーマを取り扱っているといえよう。と同時に George の祖母が作品の最後の方で “Men—they're more trouble than they're worth, when all is said. Women have to look after themselves these days, because if they don't, no one will.” (p. 120). というようなことを言っている。「男は厄介ものだ。女は自分で自分のめんどろをみなければならぬ。」——これがまさに、Drabble によれば、男性に対して極端な敵意を抱いているということで非難されたという Lessing の女性観なのだろうか、これがまさにウーマン・リブ唱導者 Lessing の描く「強い女」なのだろうか、これが *The Golden Notebook* に出てくるであろう「強い女」の原型なのだろうか、そのようなことを筆者は感じた。要するに筆者は、この作品には Lessing の女性観も現われているということで、5 つの物語のうちではもっとも興味を覚えたのである。

とはいえ5つの物語すべてが非常に巧みに描かれており、この短篇集が1954年度のSomerset Maugham Awardを受賞したのもうなずけるような気がする。ただ今日Penguin Booksでは絶版になっているのは、作品全体が雰囲気としてやや古めかしく、「アフリカ」という題材が一般読者には疎遠で、その分アピールしにくいせいだろうか。

2. *The Golden Notebook* のうちに見る Doris Lessing の女性観

そしてこの後期待を込めて読んだのが *The Golden Notebook* だった。ところがいざ読んでみると、これがあの *Five* を書いた同一作家の作品だろうかかと疑いたくなった。英語は格段に難しく、作品の構造も非常に複雑で、支離滅裂という感じさえして、ヒロインの Anna が分裂を起こしたのと同様、読んでいる筆者の頭も分裂を起こしそうだった。とにかく *Five* の著者とはまったく別の作家によって書かれた作品のような気がした。そんなわけで、Penguin 版で650ページもあるこの大作を読み終えるのに2か月を要したのである。

そして、この作品を読む前だったか、読んでいる最中だったかに、次のような Lessing 論の一節に筆者は接した。

フェミニズムとの関連で最も多く言及されるドリス・レスリングの作品は、1962年の大作『金色のノート』であろう。1960年代のウーマン・リップの運動に先がけて出版されたこの本は、その複雑な構成に骨格を与えている部分が 'Free Women' という題の小説であることも手伝って、フェミニズム擁護の本と受けとられたが、作者の意図に反したそのような受けとられ方は、作者を苛立たせたようである。約10年後には自作解説ともいべき序文を書き、この小説の中心的テーマは、人間の内面的分裂と、その再統合、再生だと述べている。⁽⁴⁾

これは『英語青年』1981年8月号が特集した「女性と英米文学」のうちで北條文緒氏が述べているものである。とすれば、この作品を「フェミニズム擁護の本」と受けとったうちのひとりである Margaret Drabble の読み方は浅かったことになるのだろうか。Drabble はさらに別のところで、「*The Golden Notebook* はもちろんウーマン・リップに関する本とみなされてきたし、そしてそれにはもっともな理由がある。……Doris Lessing は女性の解放を支持している。⁽⁵⁾」とも述べているのだ。

ここで、Drabble がこれを読むといつも涙が出るほど感動すると言っている、前に引用した *The Golden Notebook* の中の一節を振り返ってみよう。これは

作品の中の“The Golden Notebook”という一章のうちで、Annaがある短篇小説の構想を練っている時に頭の中で思いめぐらしたことである。翻訳するとだいたい次の通りになる。

しばらくして私は、自分が以前やっていたのと同じ事をやっているのに気がついた。「第3の人間」、すなわち自分よりも何から何まですぐれた女性を創り出そうとしているのに気づいたのである。というのはEllaが現実を離れて、実際には彼女の本性ゆえに振舞い、そして彼女にとっては不可能な大きな度量を備えた人間へと移り変わってゆくにまかせた時点を私ははっきりと示すことができるからだ。しかし私は自分が創り出そうとしているこの新しい人物が嫌いでではなかった。私は、われわれが想像のうちで並んで歩いているこれらの驚くべき寛大な生き物が誕生することは十二分にありえると考えていた。それはただ単にわれわれがそれらを必要とし、心に思い描くからである。

Drabbleがこれを読んで涙が出るほど感動するというのは、Annaが彼女自身よりも何から何まですぐれた、大きな度量を備えた女性を創り出そうとしており、それが可能だと述べている点にあると思われる。要するにDrabbleは、Annaが創り出そうとしているこの女性が、女性の輝かしい未来像の象徴であると考えているのだろう。ところがAnnaはこのすぐ後で、“Then I began to laugh because of the distance between what I was imagining and what in fact I was, let alone what Ella was”(p. 613). というようなことを言っているのである。「自分が想像しているものと実際の自分との間の隔たり、実際のEllaとの間の隔たりはいうまでもなく」——つまりAnnaは、彼女が想像している、何から何まで彼女よりすぐれた、大きな度量を備えたEllaと実際のEllaとの間にはあまりにも大きな隔たりがあると言っているのだ。つまり彼女が創り出そうとしているようなEllaは実際には存在しうるはずがないと言っているのだ。というわけでDrabbleが引用している一節は、彼女の意に反して、後ですっかりくつがえさされてしまう皮肉な一節ということになる。

とすればLessingはやはり女性の未来を否定しているのだろうか。そこで筆者は北條氏以外のLessing論もいくつか読んでみた。Florence Howeの「*The Golden Notebook* においては、初期症状のものであれ進行中のものであれ、狂気が、この小説全体をおおう（自由な女の）失敗という雰囲気の一部をなしている⁹⁾、Alice Bradley Markowの「Doris Lessingは西洋世界における女性たちの苦境を描き続けてきた。全作品のうちで、彼女は女性たちの『失敗』の病因(etiology)を考察している¹⁰⁾、大社淑子氏の「レッシングは、『金色のノート』において、今日のフェミニズム運動の隆盛を先取りするような形で自由

な女の題材をとりあげ、赤裸々にその挫折の姿を描いている。』井内雄四郎氏の『『金色のノートブック』では、男性中心の世界のなかで、男性に対抗し、自由に生きようとする立場を選びとった女の挫折と敗北が描かれている⁽⁹⁾』といった見解が示すように、数多くの Lessing 研究者が、彼女は自由な女の「失敗」、「挫折」、「敗北」のみを描いていると断定しているようだ。

果たして Lessing の作品にはまったく肯定的な女性観を見出せないのだろうか。確かに、*The Golden Notebook* においては、自由な女としての生き方を選んだ小説家の Anna と女優の Molly は、数多くの男たちに翻弄され挫折を味わう。もしふたりが挫折したままこの作品が終わっていたとしたら、完全に「自由な女の挫折」を描いた作品といえよう。しかし最後にふたりは立ち直るのである。Anna は労働党に入党して、1週間に2回非行少年たちの夜間学級を教えることとなり、Molly は Hampstead に家を持つ大富豪と結婚することになり、最後にふたりは Molly の家の台所でキスをして別れるのである。ふたりのこの結末での「立直り」に希望を見出すことはできないだろうか。

筆者は、この作品のうちに少しでも肯定的な女性観を見出せることを期待して、北條氏の言う、Lessing の「自作解説ともいべき序文⁽¹⁰⁾」を読んでみた。これは彼女が1971年6月に書いたもので、この作品のテーマについては次のように述べている。

In the inner Golden Notebook, things have come together, the divisions have broken down, there is formlessness with the end of fragmentation—the triumph of the second theme, which is that of unity.⁽¹¹⁾

これは Anna と米国人小説家 Saul Green が共に精神異常をきたし、共に分裂を経験するが、その後でお互いの思想に耳を傾け、共に自分自身のうちに相手を認め合い、お互いに小説のヒントを与え合い、最終的には共に再生へ向かうということだ。それが第2のテーマである「統合」(unity)の勝利だと言っているのである。そして Lessing はその後でこの作品の中心テーマは「分裂」(breakdown)であると述べているが、この作品が出版された当時は、敵意のある批評家たちばかりでなく、好意的な批評家たちからも、性戦争 (sex war) についての作品だとけなされたり、女性たちはこの作品を性戦争に役立つ武器として迎え入れたりしたので、この「分裂」という中心テーマに誰もが気づかなか

ったという。

この後で Lessing は彼女の女性観及びウーマン・リブ観について述べている。彼女は女性の支持を拒むことなど絶対したくないと言っている。多くの国で女性たちが熱を込めて訴えているように、女性は2級の人民とみなされているがゆえに、もちろんウーマン・リブを支持するとは述べているが、Lessing がそれ以上に言いたいことは次の通りだ。

ウーマン・リブが多くのものを変えるとは思わない、その理由は、その目的に誤りがあるからではなく、明らかに今や全世界は現代の激動のただ中で新しい形へと変わりつつあるからであり、たぶんわれわれがこの激動の世の中を生き抜いた頃には、もし仮にもわれわれが生き抜いたらの話であるが、ウーマン・リブの目的など非常に小さくこっけいに見えてくることだろう、ということなのである。そして Lessing は、この作品でウーマン・リブを訴えているのではなく、攻撃性、敵意、恨みといった数多くの女性の感情を描いていると述べている。

彼女はさらに次のように続ける。女性は臆病者である。というのは、女性は長い間半奴隷状態にあったからで、自分たちが実際に考えていること、感じていること、愛する男性と経験したことなどの正当性を主張する自信のある女性の数はいまだ少ない。「君は女らしくない。攻撃的だね。ぼくを縮み上がらせてしまうよ」と男性に言われたら、いまだ大多数の女性は石を投げつけられた小犬のように尻尾をまいて逃げ出すだろう。そんな脅しを使う男性と結婚したり、あるいは彼が言うことを真に受けたりする女性はどんな仕打ちにも値する。

こうして見てくると、やはり Lessing の女性観はかなり否定的なものなのだろうか。そればかりか、彼女は女性に対して不信感や敵意さえも抱いているのだろうかと思えたりする。が、しかし筆者には、彼女の女性観が百パーセントまで否定的だとはどうしても思えない。もし彼女が完全に否定的な女性観を持っているとしたら、彼女は *The Golden Notebook* を「分裂」だけのテーマで終わらせていただろう。しかし Lessing は、Anna を、この作品の第2のテーマである「統合」によって最後には立ち直らせるのである。そして Lessing は、この作品の序文の中でかなり否定的な見解を示しているとはいえ、いちおうは女性及びウーマン・リブを支持すると言っている。筆者はこのあたりに Lessing の肯定的な女性観が存在すると判断している。したがって、*The Golden Notebook* は自由な女の敗北を描いた作品だと断定してしまうことはど

うかと筆者は疑問に感じるのである。

Lessing は Florence Howe からのインタビューに答えて、「私は、たとえ *The Golden Notebook* が失敗作だと確信しておりますにしても、この作品が好きです。といいますのは、少なくともこの作品は複雑さ (complexity) をにおわせておりますから⁽¹²⁾」と述べている。そしてこの「複雑さ」ゆえに、この作品は、Lessing の意に反して、ウーマン・リブのバイブルとして読まれたり支持されたり、その他いろんな解釈がなされたのだろう。たとえば、これは Lessing の意に反するものかどうかは分からないが、Kathleen Nott は Lessing を D. H. Lawrence と対比させて、Lawrence は女性の価値をオルガスムスに身を任せる能力で評価しているのに対し、Lessing の描く Anna は男性をこのオルガスムスを女性に与える能力で評価している⁽¹³⁾というユニークな見解を示している。

さらに、Lessing が *The Golden Notebook* の序文の中で言うには、彼女のもとには、彼女の作品に関する論文やエッセイを書こうとする、多くの国の若い人々から問い合わせの手紙が殺到するようで、それらに対する彼女の返事は次の通りだという。

私が書いたものをお読みになって、それをあなた御自身の人生、経験とつき合わせて判断なさった上であなたのお考えを決められてはいかがですか。正しいかまちがっているかのどちらかのみを要求する教授たち (Professors White and Black) のことなどちっとも気になさる必要はございません⁽¹⁴⁾——これが彼女の返事だという。

そこで筆者は、Lessing の指示に従って、*The Golden Notebook* を自分自身の経験 (経験と呼べるほどのものではないかもしれないが) とつき合わせて判断することによって、自分の考えを述べてみたい。筆者は、この作品の結末で、Anna と Molly が Molly の家の台所でふたりっきりになって話し合い、キスをして別れる部分の描写を読んだ時、かつて見た『ベストフレンズ』という映画を思い出したのである。この映画は、日本では1982年に公開され、原題は *Rich and Famous* という。

The Golden Notebook の Anna と Molly 同様、この映画においては Jacqueline Bisset が演ずる Liz と Candice Bergen が演ずる Merry は親友同士。Anna 同様 Liz は小説家として幾人かの男性と肉体関係を結び、自由な女ぶりを発揮する。たとえば Anna の分身 Ella が飛行機の中で知り合った米国

人をベッドに誘ったように、Liz も飛行機の中で意気投合した男と飛行機のトイレでつかの間のセックスを楽しむのだった。そして、ともに相手の男には妻がいたのである。しかし Anna が、いくら自由な女としてつっぱったところで、結局は愛する Michael の前では弱い女になってしまったのと同様、Liz も自分より年下の雑誌記者に女の弱さを見せてしまうのだった。そして Anna も Liz も男たちに捨てられ、ともに幾多の挫折を経験した後、同じような挫折を経験したそれぞれの親友に作品の結末で出会う。The Golden Notebook においては Anna は Molly に、Molly の家の台所で、Rich and Famous においては Liz は Merry に、Liz の家の一部屋で。Molly が Anna に、“‘Actually I think we’ll get on very well.’” と語りかけると、Anna が、“‘I don’t see why not.’” と答え、一瞬の沈黙の後お互いにキスを交わして別れる。Liz と Merry もまた、燃えさかる暖炉の火を横にして、静寂の中でキスを交わし、グラスを合わせ、お互いの友情を確認し合う。

このふたつの作品を比べてみると、スケールの大小の差こそあれ、根本的なテーマの違いこそあれ、いくつかの共通点を見出すことができる。スケールの大小の差というのは、Rich and Famous は Liz と Merry を主人公としてひとつのプロットが進行するだけなのに対して、The Golden Notebook は Anna を主人公としたプロットに加えて、彼女が描く、Ella を主人公とした小説のプロットが同時に進行する、ということだ。すなわち小説の中に小説があり、その中では、Anna の親友 Molly は Julia という分身となって登場している。そして根本的なテーマの違いというのは、Rich and Famous の場合、『ベストフレンズ』という邦題が示す通り、「友情」を大きなテーマにしているのに対し、The Golden Notebook の場合、Anna と Ella の友情ということはあまり Lessing の念頭にあったと思われず、彼女がこの作品の序文の中で述べているように、自由な女の「分裂」、「統合」ということが大きなテーマであり、それに、小説はいかに書かれるべきかという、小説形式に対する模索といった副次的テーマが付随している。したがって、ある意味では、The Golden Notebook は実験小説と呼ぶことができよう。

共通点というのは、両作品とも、男性中心の社会で男性と対等に生きてゆこうとする自由な女の敗北、挫折といったことをある程度まで訴えかけているということだ。したがって、The Golden Notebook のうちに出てくる“Free Woven” という5つの章にしても、『ベストフレンズ』の原題 Rich and

Famous にしてもまことに皮肉なタイトルということになる。しかし Anna と Molly のふたりにしても、Liz と Merry のふたりにしても、それぞれの作品の結末においては「再起」への第一歩を踏み出している。Anna は非行少年たちを教える教師として、Molly は結婚によって、Liz と Merry は友情という固い絆によって。これからは、彼女たちが女として本当に強く生きてゆくことになるのかもしれない。これからは彼女たちの本当の人生の始まりであると筆者は考えたい。

もうひとつの共通点として上げられることは、*The Golden Notebook* が攻撃性、敵意、恨みといった数多くの女性の感情を描いているのと同様、『ベストフレンズ』もこれらの女性特有の感情を描いているということだ。*The Golden Notebook* のうちでもっとも端的に女性の攻撃性を表わしていると思われるのは、1955年11月11日の Anna の日記（3番目の“The Black Notebook”）のうちに出てくる小事件だ。London の歩道を、バスに乗るため足早に急ぐ人々の間を一羽のハトがよたよたと歩いており、そのハトをひとりの男性が誤って蹴って死なせてしまった。それを目撃したある女性が “You brute! Kicking a pigeon! … ’You’ve killed it — kicking a poor little pigeon!” (p. 403) とどなりつけながら詰め寄り、彼をすっかり困惑させた。群がってきた人々の中のふたりの少年が彼女をからかい始め、彼女は彼らに対しても、お前たちも牢獄へ行けどどなりつけるのだった。ハトを蹴った男性は誤ちだと言いつつをしたが、なおも彼女は、あんたの名前と住所を言いなさいよ、私はあんたを裁判に訴えてやるから、と詰め寄るのだった。そこへひとりの男性が仲裁に入って来て、そのハトを拾い上げごみ箱に捨てようとする、彼女はやさしい口調になって、そのハトを私にください、私の家の植木箱に埋めてやりますので、という旨のことを彼に依頼するのだった。その男性は、これは助かったとばかりにそのハトを彼女に渡し逃げ去って行った。彼女はひとり残され、死んだハトの嘴からしたたり落ちる血を嫌悪の表情で眺めるのだった。結局、一番バカを見たのは彼女であり、何かここに Lessing の女性に対する皮肉が込められているような気がする。この小事件のうちに、男性と対等に生きてゆこうとする自由な女の敗北、挫折が暗示的に示されていると言えないだろうか。

一方、*Rich and Famous* における女性の攻撃性、敵意、恨みといった感情は、Liz と Merry のお互い同士の口論のうちに、そして彼女たちと男性たちとの口論のうちに見出される。⁽¹⁶⁾ 最初の百ページを仕上げるのに5年間かかるな

ど、小説家として、*The Golden Notebook* のヒロイン Anna 同様極度のスランプに陥っていた Liz は、今や幸せな主婦となった親友 Merry が8か月で一冊のセンセーショナルな小説を書き上げたのにショックを受け、Liz の嫉妬がもとでふたりは陰惨極まる口論を始めるのだった。Merry はこの小説で大成功を収めるが、それとは裏腹に夫の仕事は失敗の連続で、夫婦の間にはいつの間にか隙間風が吹き始め、とうとう引越しをめぐっての口論がもとでふたりは離婚してしまうのだった。一方、Liz の方も、愛していた若い雑誌記者を怒らせて、彼に捨てられてしまい、彼は Merry の娘を連れ去って行ったのである。これがもとで Liz と Merry のふたりは再び気が狂わんばかりの口論を始めるのだった。Liz も Merry も小説家として多大な富と名声を得たが、それと同時に愛する者すべてを失ってしまった。ここに *Rich and Famous* というタイトルの皮肉を見ることができよう。

しかし筆者はもう一度繰り返したい。Anna も、Molly も、Liz も、Merry も、それぞれの作品の結末では、確実に「再起」への第一歩を踏み出している。彼女たちは、それまでに経てきたいろんな人生の試練を土台として、これからは本当に強い女として羽ばたいてゆくのだ、これからが本当の意味での“rich”な人生を彼女たちは送ってゆくことになるのだ、と筆者は確信している。

なお、筆者がこの論文に取りかかっている間に *The Golden Notebook* の翻訳が出版されたことを知った。日本人として初めて Lessing に会った、島根大学の市川博彬氏の手によるもので、『黄金のノート』というタイトルで、英雄社から出版された。1970年代には、ウーマン・リブ運動が全盛を極め、「翔んでる女」という言葉が盛んに使われ、そういった「自由な女」、「結婚しない女」みたいなものがもてはやされたが、今はやや下火になったように思われる。ところが80年代になって、離婚率の上昇ということが世界的な規模での問題となって起きてきた。結婚してから女性はいかにして人生を送るか（たとえば、どのようにして人生を充実させるか、どのようにして結婚生活と仕事を両立させるか）、といったことが新たな女性問題としてクローズ・アップされてきた今日、Doris Lessing、Margaret Drabble のような、女性の生き方を真剣に問うている作家たちが幅広く読まれてもいいのではなかろうか。このような事情で、市川氏の翻訳が出版されたのかもしれない。そしてこれは画期的な翻訳事業といえるかもしれない。これを機に、わが国でも女流作家の研究が盛んになるこ

とを祈る次第である。

Notes

- (1) Margaret Drabble, "The Tradition of Women's Fiction: Jane Austen to Doris Lessing," *The Tradition of Women's Fiction* (Tokyo: Oxford Univ. Press, 1982), pp. 1—18.
- (2) Doris Lessing, *The Golden Notebook* (London: Granada, 1983), p. 613.
- (3) 筆者が用いた版は、Doris Lessing, *Five* (Harmondsworth: Penguin Books, 1960)
- (4) 北條文緒「ドリス・レッシング」、『英語青年—特集=女性と英米文学』1981年8月号(研究社)。pp. 41—42
- (5) Margaret Drabble, "Doris Lessing: Cassandra in a world under Siege," *Ramparts*, 10 (Feb. 1972), 52.
- (6) Florence Howe, "Doris Lessing's free women," *Nation*, 200 (11 Jan. 1963), 35.
- (7) Alice Bradley Markow, "The Pathology of Feminine Failure in the Fiction of Doris Lessing," *Critique*, 16, No. 1 (1974), 88.
- (8) 大社淑子「自由な女の敗北—ドリス・レッシング」、井内雄四郎、大社淑子共著『現代イギリスの女流作家たち』(評論社、1979)、p. 146.
- (9) 井内雄四郎「ドリス・レッシング」、福田陸太郎編著『イギリス女流作家群像』(駸々堂、1983)、p. 303.
- (10) "Preface," *The Golden Notebook* (Granada, 1983), pp.7—22.
- (11) *Idid.*, p. 7.
- (12) Florence Howe, "A Talk with Doris Lessing," *Nation*, 204 (6 March 1967), 313.
- (13) Kathleen Nott, "Counterpoint to Lawrence," *Time and Tide*, 43 (26 Apr. 1962), 33.

- (14) "Preface," *The Golden Notebook*, p. 18.
- (15) *The Golden Notebook*, p. 638.
- (16) この後に述べているプロットに関しては、映画パンフレット『ベストフレンズ』（東宝出版事業室、1982）を参照した。